

## 四旬節第3主日

2017.3.19

ヨハネ 4・5-42

松浦謙神父（大阪教区司祭）

今日の福音は、サマリア地方を通過して旅をしていたイエスがヤコブの井戸のかたわらで一人の女性と出会った時の出来事を伝えています。この時イエスはとても疲れて一人座っていた。弟子たちは食べ物を買いにでかけていっていた。一人のサマリア人の女性が水汲みに。イエスは「水をのませてください」と願う。イエスは、常に人々に与える人として描かれている。病人を癒し、目が見えない人を見えるようにし、パンや食べ物を与える。命令によって悪霊は追い出す。けれどもこの時イエスは「わたしに水を飲ませてください」と懇願する。好意を示してほしいと願う人。あなたが必要です。疲れて喉が渇いている。それはサマリアの女にとって予想もできないことだった。「あなたはサマリア人のわたしに水をのませてくださいというのですか?」。ユダヤ人とサマリア人。その頃お互い憎みあい口をきかない。当時は断絶状態。相手の土地に足を踏み入れるのはばか。決して交わらない。イエスはそのサマリアの女性にごく普通に、当たり前のように頼む。水を飲ませてください。イエスにとっては敵味方の隔ては全くない。一個の人間として。このイエスの姿勢に女は驚いたのです。彼女にイエスは言われた。「もしあなたが水を飲ませてくださいと言ったのが誰であるか知っていたなら、あなたのほうから頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」。この井戸水を飲んでも、いずれまた渇く。決して渇くことのないいのちの水があるのだ。満たされない心をいやす水。魂の渇きを満たす水がある。女性の心を揺さぶられる。実は彼女は、人には隠しておきたいことがあった。とてもゆがんだ乱れた生活してきた。これまで彼女は4人の男と一緒にいた。4回結婚し4回とも別れた。今5人目の男と一緒にいる。そのことをちまたの人は知っているからひそ

ひそ噂話をしたり、ことさら避けたりする。だから彼女はなるべく人の来ない昼間に水を汲みに来たかも。心の内には人には言えない苦しいものがあったのではなかっただろうか。

この場面を想像したときわたしはかつて教誨師をしていた時に経験したことを思い出す。受刑者と30分のみ面会。一人の女性。彼女は特定の宗教をもたない。でも神様を信じているようだった。わたしに聞く。「教会では、亡くなった人の供養してくれるのか」と切り出した。そこで少し詳しい事情を聴く。彼女は暴力団の幹部クラスの人の愛人だったよう。何人かの男性と一緒にいた。そして子供をみごもったが、産むことはできなかったという。生まれてくるはずだった赤ちゃんに自分は名前を付けていた。その子たちのために供養して欲しい。わたしは「カトリック教会でミサという祈りがある。その子のためにささげます」。名前を書きとめようと思って手帳を出す。彼女はなんとよどみなく10人の名前を言った。漢字で愛、英里、雪、愛音、光、雷夜、心・・・その名前をわたしは書き留めながら、彼女がどんな人生を歩んできたのか思い、胸が痛くなった。「神様はいつくしみ深いやさしい方です。あなたを今も心から愛している。そしてこれから前を向いて生きていくことを望んでいる。あなたの子供たちを天国に迎えてくれるから安心してください」。彼女は少し涙ぐんで、刑務所を出たら人のためになる仕事をしたい、特に少年少女を助けることをしたいと言っていた。「わたしが与える水を飲むものは決して渴くことがない」。イエス様はご自分が人々の心の渇きを真に満たす者であると言われる。サマリアの女性は「主よ、どうかその水をわたしにください」、重荷を取り除き、傷をいやして欲しい、救って欲しいと願った。イエス様自身が与えてくださる水。心の渇きを潤し、生きる力を与え、本当の喜び、決して滅びることのない永遠の命を得させる命の水。イエスはどのようにしてその永遠のいのちに至る水を与えられるのか。パウロは言う。「わたしたちがまだ罪びとであったときキリストがわたしたちのために死んでくださっ

たことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」。イエスが御自ら十字架にかかりいのちをささげることによってわたしたちに永遠のいのちをもたらす。教会憲章3に、十字架上のイエスのわき腹から流れる血と水から教会が生まれたと述べられる。いのちの水は今も教会に流れ続ける。主イエス・キリストのおられる教会は今も、尽きることのなく水が湧きいでる場。そしてそれは世の終わりまで決して枯れることはない。水の注ぎ—洗礼によってわたしたちは滅びることのないいのちに新しく生まれた。疲れ、渇きを覚えるときここに来て汲み尽せぬ泉から飲みましょう。恵みのみことば。聖なるパンと杯、そしてゆるしといやしがある。主キリストが共にいて、弱く力のないわたしたちを再び立ち上がらせ、新たに活かす。サマリアの女は、イエスのことを村人に告げに行った。自分が周りからどんな風に見られるのかもはや全く問題でない。自分が見たこと、体験したことを話せずにおれなかった。「わたしはメシヤに出会った！来て見てください」。わたしたち自身、イエス様に出会えた恵みに心から感謝し、この方こそ滅びることのない命の与え主であることを人々に証しし希望をわかちあうことができるように願おう。こうしてすべての人が父なる神を心から賛美し褒め称える日が来るように祈り続けよう。